

『九段フェス2022 アフターレポート』

2022年3月20日[日]九段生涯学習館にて『九段フェス2022』を初のオンライン開催で行いました。生放送と収録、無観客と新しいことずくめの九段フェスの当日の盛り上がりをお知らせします。



▶お家でかんたん！
その場でエクササイズ
Ayapanda
[あやばんだ／振付師・ダンサー]

椅子に座りながらでも簡単にできるエクササイズを教えてくださいました。オープニングイベントということで、スタッフも一緒に緊張した心身をほぐしました(笑)



▶カラーコーディネート講座～東京のお洒落は江戸発信！～
中間貴恵[カリリスト]

現代の東京のファッション・色遣いのセンスが実は江戸時代の美意識をルーツにしている、という興味深い講義でした。街角の色にもぜひ注目してみてください。



▶舞台発表 第1・2部
当館で活動中のサークルが日ごろの成果を発表。生放送でお送りしました。

メンバーの豊かな表情が伝わるころはオンラインならではの良さでした。歌や演奏、踊りで盛り上げていただき、フィナーレには同時接続人数も最多を記録！



▶紹介動画
サークルの普段の活動の様子を、スタッフがマイクを持ち突撃取材する形式

でお届けしました。計11団体、そのジャンルは多岐に渡り、バラエティに富んだ時間となりました。気になる活動は見つけられましたか？

これらのプログラムは現在でもYouTubeでご覧いただけます！当日忙しくて見られなかった方・お気に入りのサークルを何度も見返したい方、右のQRコードよりご覧ください！九段フェス2023もどうぞお楽しみに！



column

／ちょ／っと探訪④

アテネ・フランセ

Athénée Français

千代田区神田駿河台2-11
03-3291-3391
https://athenee.jp/

——「ちょっと探訪」では、知る人ぞ知るちょだの魅力に迫ります。第4回は、インスタ映えスポットで人気の建物のヒミツにも迫ります。

御茶ノ水から続くマロニエ通りを行くと、ひときわ目立つピンクの建物がある。1913年設立の現存する語学学校で最古のアテネ・フランセ。特にフランス語学習の名門で、過去の卒業生には、谷崎潤一郎、坂口安吾などが名を連ねる。現在の校舎は1962年、ル・コルビュジェの愛弟子の一人である吉阪隆正氏によるデザインだ。早稲田大学教授で著名な登山家でもある吉阪氏が“アンデスに沈む夕陽の色”と表した色で、ATHENEE FRANÇAISのステンシル文字を配している。レトロ感あふれる図書室。地階だが、窓から光が差し込む暖かい雰囲気のある学生ホール。知のシンボルである女神ミネルヴァの横顔の掘り込み。独特な角度のベンチや階段の手すりにも吉阪らしさがあふれる。



▲ピンクが印象的なアテネ・フランセの外観



▲ベンチが並ぶ学生ホール

フランス語・英語・古典ギリシャ語・ラテン語はひろく生涯学習として門が開かれ、レベル別クラス編成、担当講師も皆有資格で経験豊富な精鋭ぞろいだ。映画による国際交流を目的とする文化センターの存在も貴重で、世界各国の埋もれがちな映画・映像を上映し、講演会やシンポジウムなども開催して、文化発信基地の役割を果たしている。長きにわたり携わる事務局長の細野修一氏が、過ぎ去った時間に想いを馳せて語った。「このところのコロナ禍で、文化事業が受けた打撃は計り知れない。日本の中心ともいえる千代田区で、とにかく文化に目を向け続けて欲しい。文化の灯を消すわけにはいかないのです。」



編集後記

DanDan編集部 堺

今年度のDanDanのテーマは「生涯学習ダイバーシティ」。「diversity=多様性」と訳されますが、多様という単語は人種や国籍、性別、年齢のほかにも価値観や環境、嗜好、関係性と挙げたらきりが無いほどの選択肢を含んでいると思っています。その選択肢は無限に分岐できますが、今年度の特集は生涯学習という一つの目的を持って展開されます。座学であっても得られるものは知識だけではなく、経験や理解、それによる自身の変化、その後のあらゆる物事の判断にまで及ぶかも知れません。そして私たちも座学にとどまらない、楽しみながら視野を広げられるようなさまざまな取り組みを作り上げていきます！

／九段から発信する生涯学習コミュニティペーパー／

volume

29

TAKE FREE

DanDan

ありがとう、ゆっくり、まあるく、かがわっていく

生涯学習ダイバーシティ

今年度のDanDanのテーマは「生涯学習ダイバーシティ」。個人それぞれの多様性が認められるようになってきた令和の時代。学びのかたちに目を向けて見ると、そこにもまた色とりどりの多様性が存在しています。では“多様性”とはどのようなかたちをしていて、どのように理解をすれば良いのでしょうか？



▼コミュニティづくりの実践者と出会う
／フィールドワークにて

LEARN DIVERSITY!!

『「生涯学習」とは、一般には人々が生涯に行うあらゆる学習、すなわち、学校教育、家庭教育、社会教育、文化活動、スポーツ活動、レクリエーション活動、ボランティア活動、企業内教育、趣味など様々な場や機会において行う学習の意味で用いられます。』——引用：令和2年度 文部科学白書本文（令和3年7月20日時点）

皆さんは“市民大学講座”にどのようなイメージを持っていますか？ 今号は「ちょだ生涯学習カレッジ」で学長を務めている佐藤晴雄先生にお話をお伺いしました。「ちょカレ」と呼ばれ親しまれている千代田区初の区民カレッジは、2016年秋に開校以来、地域の特性を活用しながら、現在は第6期生とともに多様な学びを目指しています。

そして現在・未来の学校教育や、大人の学びのかたちはどのように変化しているのでしょうか？ 教育委員会・社会教育主事や大学教授の経歴を持ち、広く教育現場を知る先生へ、日頃の疑問をたずねていきます。

もくじ

【特集】生涯学習ダイバーシティ | ちょだ生涯学習カレッジ

【L.L.News】九段フェス2022アフターレポート 【コラム】ちょっと探訪④ | アテネ・フランセ

ちよだ生涯学習カレッジとは？

ちよカレは、千代田区在住・在勤・在学者を対象とした“人とコミュニティをつなぐ資質”を育む、1年制の区民カレッジです。月2回・平日夜を中心に開催するプログラムには第一線で活躍する講師が登場し、同じ志を持った新しい仲間と充実した1年間を過ごします。講義やアクティブラーニング、フィールドワークを取り入れて千代田区の現状・課題を的確に捉えることで、当事者意識を持って最適解を探究・デザインする基礎を養います。

3つの方針

- ▶千代田区・地域・コミュニティ／Think globally, act locally：地球規模で考え、足元から行動する
- ▶学ぶ・つながる・続ける／Active learning：能動的学修
- ▶プロボノ精神＊／Speciality & Work life balance：専門性・仕事と生活の調和

＊プロボノ：職業上持っている知識、スキルや経験を、公共的な目的のため貢献するボランティア活動



▲千代田区の歴史・文化について学ぶ

Think globally, act locally



▼まちあるきで日比谷図書文化館を訪れる

LEARN DIVERSITY!!

▼講義ではグループディスカッションも行われている



Active learning

ちよカレの学びのスタイルは？

講義形式の座学にとどまらず、グループワークなどで自分自身の考えを整理し学びを深めます。課題作成にも取り組み、“ちよだのいいところ探し”ではプレゼンテーション能力も養いました。

どんな人が集まっている？

千代田区在勤の現役世代、リタイアした学び直し世代など。年齢・職業も全く違う人々が集い、学ぶことである種の摩擦も生じますが、それを楽しむことこそ大人の学び合いの醍醐味と言えます。卒業生の中には英語ボランティアガイドの団体を立ち上げたり、千代田区の委員会に参加したり、地元でちよカレでの学びを活かしたコミュニティづくりを実践している方もいます。



▲共に学んだクラスメイトとその後の活動を共にする人もいる／第1期卒業式にて

Speciality & Work life balance

現在のちよカレ6期「地域デザインコース」の“志”は？

流れゆく世界の中で常にアップデートする必要のある学びを求め、自らのライフデザインを見つめ直し、地域に還元することを目指します。

EDITOR
Sakai Aika (chief)
Takano Yuta
Onoda Junko
DESIGN
Kawahara Kotaro



Interview

佐藤 晴雄 先生

【日本大学文理学部教授／ちよだ生涯学習カレッジ学長】

——まずは「ちよカレ」創設時、佐藤先生はどのように関わっていたのでしょうか。

千代田区の生涯学習推進委員に8期(2010年4月)より携わっていますが、当時から「地域コーディネーターの養成」がテーマにありました。10期の報告書(2016年3月)には“生涯学習大学の創設について”の提言がされ、当時の石川区長の賛同も得られたことで、「ちよカレ」としてすぐに実現されました。『学びと地域のコーディネーター養成コース』から始まり、3期には『千代田まちマイスターコース』が併設。5期より学習期間が2年間から1年間に見直され『地域デザインコース』に統合するなど、社会の変化や多様化する学習ニーズに対応しています。

——時世に合わせてプログラムも変化しているのですね。現在6期を迎えたちよカレですが、今後も目指すかたちは変わっていくのでしょうか。

現在の課題は、卒業生へのフォローや、地域の学校とどう繋げていくかでしょうか。千代田区は教育委員会と生涯学習事業をそれぞれ別の組織が担っていますが、ちよカレはその間を繋ぎきつかけになるのではと考えています。千代田区の小中学校は進学志向が強いため、他の地域よりも内から外を見る目に長けていますが、そこに地域を見つめるちよカレ生の目が加わると、また違った考えや発想が双方に生まれるかも知れません。

一例ですが、地域の方が丸つけなど採点を担当したり、さまざまな職業の方が学校で講話をしたりという方法で関わっている市区町村があります。大人が子どもから学ぶことも多く、仕事や家庭以外の繋がりによって元気をもらえることもあります。もちろん子どもも

普段学校にいる先生とは違う価値観を持った人と触れ合うことで得られる社会性もあるでしょう。

——生涯学習について、先生の考えをお聞かせください。

大人の学び直しやリカレント教育が謳われている昨今ですが、実際にリカレント教育を行う場所は大学院で、内容としても研究や高等教育が多いのが現状です。しかし学び直しのあとの行動や計画がなければ意味がなくて、経験や体験があつてこそ「腑に落ちる・合点がいく」という本当の学びになります。「わかるけれどわからない」という事柄は自覚がなくとも世に溢れていて、それらを意識する必要があるのです。

わかったつもりの例として、「布が破れたので、干し草の高さが重要になる」という文があります。どのような意味でしょう？

.....

このままでは前後の文章の意味が繋がらないと思いますが、ここに「パラシュート」というヒントが加わります。すると「パラシュートの布が飛行中に破れたので、着地のクッションのために干し草の高さが重要になる」という文章の真意がわかります。さまざまな事柄を理解するためにはその事柄が置かれている状況や場面を理解することが大切で、学校の内・外という場面においても同じようにわかること・わからないことがあるのです。

「教育＝education」は外側に向かう言葉を表すeが付くので個性・能力を引き出すという意味を含んでいますが、反対に「指導＝instruction」は内側に向かう言葉を表すinが付くので仕組みや構造、知識、技術を得ることを意味します。「education」であるアクティブラーニングやゆとり教育を推し進めた時代も、また学力が低下したと否定され「instruction」を推し進めた時代もあるように、どちらかだけを学んでも必ずどちらかが不足するのです。どちらも必要な学びとして、学習者が主体的に理解をすすめていけるといいですね。

▼バラスポーツから社会の多様性を考える／オープンカレッジにて

